

【書評】小林亜津子『看護が直面する11のモラル・ジレンマ』ナカニシヤ出版 二〇一〇年 倫理学教育の二つのジレンマ

大橋, 基 / Ohashi, Motoi

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政哲学 / 法政哲学

(巻 / Volume)

7

(開始ページ / Start Page)

59

(終了ページ / End Page)

62

(発行年 / Year)

2011-06

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008011>

【書評】

小林亜津子『看護が直面する11のモラル・ジレンマ』ナカニシヤ出版 二〇一〇年

倫理学教育の二つのジレンマ

大橋 基

教壇に立つて倫理学を扱っていると、たびたび直面するジレンマがある。それは、問題になっている事柄について善悪の判断を下すために、理論的に入り組んだ学説をもちだした途端、学生たちの興味や理解度が減退していく、という事態である。これは、学生の勉強不足や抽象的思考への不慣れに由来するものではなく、倫理学が宿命的に背負っている制限のあらわれである。つまり、普段の生活のなかで知らず知らずのうちに依存している道徳直観が、原理へと解体された上で、論理的に整合性の高い推論を通して再構成されることで、冷え冷えとした理論言語に豹変してしまうことが、学生たちの気をそいでしまうのである。

いくら確実な原理にさかのぼっても、そこからどんなに精緻な推理を重ねようとも、そうするほどに現実の道徳に

そなわっていた生活実感はこぼれ落ちていく。実践的な共感の強さは理論的な深みに比例しない。その意味で、倫理学は近代科学の発想とは異なる真実らしさに頼らざるをえない分野なのである。そのため倫理学を教えるさいは、個々の学説が私たちの生活世界に浸透していることを忘れさせないために、理論と具体例が乖離しないよう、トピックを作りこまなければならぬ。それを忘れれば、倫理学教育は、高名な哲学者たちの名のもとで、杓子定規な教説を繰り返す、退屈なお説教になってしまうだろう。

そのようなジレンマに直面した評者が、教室が冷え込みそうになる度に、学生の興味をひきつける事例を探し出そうと手に取ってきたのが、小林亜津子氏の前著『看護のための生命倫理』である。医療者の倫理として出発しながら

も、徐々に当事者の観点を失い、理論言語に埋没しつつある生命倫理学を、もう一度、生死の現場に引き戻して、医療や看護に携わる人々が患者やその家族と共に問題を考えるための手引きを与えようとした同著は、大学の専門教育を越えた広範な読者を獲得し、高い評価を得た好著であった。本書は、そうした特徴を引き継ぎながら、より先端的な技術を念頭に置いて、医療や看護の現場で起こりうるモラル・ジレンマを集成したものである。

本書には、十一個のテーマのもと、「内部告発」「デザイナー・ベビー」「余剰胚」「動物の権利」といった応用倫理学のおなじみの論点から、「性同一性障害」「結合双生児」「認知症患者」など、ここ数年のあいだに身近になってきた事象までが網羅されている。著者はこれらのテーマに関して、実際に起こった事件や裁判を素材として、そこで争点となりうる論点を手際よく整理していく。

私たちの多くは、「人工妊娠中絶」が倫理的に異論のある行為であると感じてはいる。しかし、この問題が、医療機関における中絶胎児の扱いの残酷さ、その責務を担った医療者の苦しみ、亡くなった胎児の身体組織が薬剤や治療法の開発に対してもつ意義、その効用を期待する患者の存在、そこにビジネス・チャンスをかがう医薬品業界といった錯綜した背景をもち、それぞれの場面に倫理的な問題が生

じていることは、あまり知られていない。

このような問題の連鎖は、ひとつのテーマのなかで、あるいは、あるテーマから別のテーマへの移り変わりのなかで、めまいをもよおさせる程の複雑さと解きがたさを呈する。だが著者は、忍耐強く、それらひとつひとつの問題を丹念に関係づける。それは、安易な解決を避け、正確な状況認識と広い視野のもとで個々の問題を思考するように読者をいざなうためである。本書のキーポイントで、著者は繰り返し読者に尋ねる。

「あなたは、どう思うだろうか？」

しかし、そうした本書の特徴は、裏返せば、著者自身の倫理学的見解がどのようなものか、という点での食いたりなさを感じさせる。だが、そうした評価は拙速である。というのも、著者自身がどのような見解に共感をもっているかは、ひとつのテーマのなかに組み込まれた複数の倫理問題の並べ方に、あるいは、原理的に突き詰めていくとまずもって解決しなければならぬのはどの問題か、といった論点の持ち出し方に、表現されていると思われるからである。紙幅の関係上、テキストを詳細に分析することは遠慮せざるをえないが、以下では、その一例を示してみることにしたい。

たとえば第六章で、著者は、中絶胎児の脳組織を移植す

ることです。パーキンソン病の改善に成功した患者の発言を取り上げる。それは、「命は神から与えられるものです。胎児組織は移植に使った方が、ゴミ箱に捨ててしまうよりずっと大切にしていることになると思います」という発言である。次いで、先に挙げたような背景事情を確認しながら、徐々に、この発言についての感想や意見を読者に問い掛けていく。そして、著者自身が大学で講義したさいに学生が示した反応のなから、肯定的な意見と否定的な意見を紹介する。

そこで著者が最も強調するのが、「難病に苦しむ患者や障害者が胎児組織の移植を受けることは、『弱者の立場を熟知しているはずの患者や障害者が、人間社会のもっとも弱いメンバーである胎児から利益を得ようとするのだ』という、かなりシビアな批判」である。このような意見を取り上げながら、著者はそれに対する評価を示すことなく、冷静沈着に、ここで問題とすべき論点へと視点を絞り込んでいく。

それは、妊娠中絶と組織移植を「共犯関係」と決め付けず、異なる医療行為として区別する、という論点であり、ここから、二つの行為の利害が連動しないような条件を立てることによって、倫理的非難を回避する可能性を見出せるのではないか、というノーマン・フォードの「倫理的バ

リア」説が検討されることになる。そして、最後に著者は、胎児市場に対する懐疑を語るアメリカの弁護士発言を引用することで章を閉じるのである。

以上のような議論の流れは、教科書的な手続きを踏んでいる。しかし同時に、ここには、教科書として企画された本書の枠内で、はからずも抑制を解いた著者の肉声が聞き取れるのではないだろうか。それは、死亡胎児の身体が経済的利害に左右されるという形で生命の尊厳が冒されることを断固として拒絶する一方で、医療行為の可能性を閉ざすことのないように配慮する、という困難な課題を解決しようという方向性である。このような読み方をしたとき、「あなたは、どう思うだろうか」という読者への問い掛けには、「私はこう思う」という著者の訴えが読み込まれて、それに応えてほしい、という迫力をもち始めるのである。

おそらく、著者は講義のなかで、みずからの立場や見解を示しながらテキストを読み進めているのだろう。しかし、本書が講義用の教科書としてではなく、一般書として読まれた場合には、倫理学教育につきまとうもうひとつのジレンマが生じるおそれがある。それは、学生のなかにしばしばみられる「情報依存症」とでも表現すべき態度を許してしまうのではないか、という危惧である。

評者の経験では、ある具体例のなかで登場人物がとった

行動について倫理的な評価を問うたとき、学生の多くが口にするのは「情報が足りないから判断できない」という科白である。実際、授業で取り扱う具体例は、理論的な論点を明確にするために、背景事情や人物像などを切り詰め、単純化されているから、この主張は、もっともなことのように思える。しかし、この科白を発する学生がほしがっているのは、道徳的判断を下すために補う必要のある文字通りの「情報」ではなく、当該の行動やその意図が考察する必要もないほど明白に自分たちの道徳直観に一致もしくは抵触することを示すような〈情報〉なのである。

その証拠に、そうした主張をした学生が満足する程度の〈情報〉を与えたときの答えは、「許せない」か「仕方ない」かのどちらか、すなわち倫理的考察を放棄した投げやりな断定になってしまうのである。

倫理学を学ぶなかで、こうした反応を示す学生は少なくない。むしろ、大多数がそうだとと言っても間違いではない。「そんなことはない、学生は真剣に問題を直視して、解決に向けて取り組んでいる」と感じている教師は多いかもしれない。しかし、とくに医療や環境に関わる応用倫理学の場合、学生たちの興味は、スキヤンダラスな出来事やそこに巻き込まれた人々の境遇に傾きがちで、倫理問題の認識から考察へと進むのは容易ではないのである。それは、一

般の読者でも同じことだろう。

そうした状況を念頭に置いたとき、本書の豊富な問いが読者から思考の道筋を見失わせ、そのあげく読者が、みずから進んでデッド・エンドに行き着くための材料として、それらの〈情報〉を利用しかねないという不安がよぎる。

このような事態を回避させるのは、やはり著者自身がそれぞれの問題に暫定的な答えを与えた上で、それに対しての判断を読者に委ねる、という赤裸々な態度であろう。各章・各節の随所で挿入される問いかけが、「私はこう思うが、あなたはどう思うだろうか」という形で示され、著者自身の見解に向けられたとき、読者は生命倫理学者・小林亜津子氏と対話をはじめることができる。共に考えようとするとき、ひとは必ずしも同じ方向を向く必要はないのである。

本書で提示された様々な問いに対して、著者がどのような回答を与えていくのか。研究のさらなる発展を期待したいと思う。